

詩篇95篇7-11節 「神を試す罪」

1A 御声を聞かない過ち

2A 心を頑なにする過ち

1B 祈りが聞かれない時

2B 辛い出来事がある時

3A 神の良い御心

1B 聖めのため

2B 不平を鳴らす罪

3B 心の迷い

4B 入れない安息

本文

詩篇 95 篇を開いてください。私たちは、詩篇の学びを 95 篇から 100 篇までを午後礼拝でやっていきたくと思いますが、今朝は 95 篇 7-11 節を見ていきたくと思います。

今、私たちが交読文で読みましたように、この詩篇は主に向かって喜び歌おうという、礼拝に対する招きの歌です。私たちが先ほど、主に対する賛美を歌いました。こんなにすばらしい、大いなる方を喜ばないでいられぬはずがありません。この喜びを言い表していいものか、遠慮深い私たち日本人は迷いますが、いいえ、主の前ではこれは命令として、喜びなさいとしています。

1A 御声を聞かない過ち 7

私たちは、主にあって喜び命令をこのように受けていますが、それを妨げる要素が立ちはだかります。喜びの中で信仰の競走を行なっているのに、そこに立ちはだかる障害があります。私たちは霊の戦いの中にいて、敵の策略があります。私たちの救いの喜びを摘み取る敵の存在がいます。心をしっかりと見張っていなければいけません。

けれども、私たち自身の内にその喜びを奪い取る何かがあります。それは、私たちの心そのものです。「心をかなくなにする」ということです。7-8 節にこう書いてあります。「7 主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。きょう、もし御声を聞かぬなら、8 メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」主が私たちの声をかけてくださいます。私たちが主をほめたたえ、主を畏れ敬ってひれ伏す中で、主がご自身の声を御言葉をよって、またご聖霊によって直接、私たちの心に語られます。その時に、その言葉を無視してはいけない、ということです。

私たちが何か霊的に失敗をする時、罪を犯してしまったり、罪を犯して惨めな状態に陥った時に

は、必ずその前に主が自分の良心に語られていることがあります。主は私たちが災いから守ろうと、前もって注意喚起をしておられます。けれども、それを無視してしまっているから、その失敗の中に陥っています。聞いているのですが、それを自分のものとして信じて、受けとめていないのです。それでせっかく得られる喜びが、その時点で途絶えてしまうのです。

私たちが、今、ここにいる時に、目には見えませんが、実に数多くの電波や無線が飛び交っているはずで、スマートフォンに接続すれば、必ずいろいろな情報にアクセスできます。主は同じようにして、ご自身の御霊によって教会に対しては、数々の周波数を送っておられます。イエス様は、黙示録の七つの教会に対して、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。(3:6)」と言われました。同じように福音書においても、主は、譬えを語られた後に「耳のある者は聞きなさい。(マタイ 13:9)」と言われました。

2A 心を頑なにする過ち 8

1B 祈りが聞かれない時

しかし、私たちは、心を神に対してむしろなくなにする時があります。主があることを通して語りかけておられるのに、それに聞こうとしないのです。そのような怒りに近い心、苦々しい心になぜなってしまうのでしょうか？いろいろな原因がありますが、代表的なのは、「届けられない祈り」です。「神は死んだのか？」の映画に出てきた、無神論者の大学教授の言葉を覚えていますか？クリスチャンの学生に対して、病気にかかった熱心な信者であった母親のために祈ったけれども、その祈りが聞かれない、ということで神に対する怒りと憎しみを抱いていました。このように、聞かれない祈りによって神に聞くという行為をやめてしまう人たちがいます。

けれども、そもそも祈りとは何であるかを間違っていて理解しているので、そうなってしまいます。自分の願いを神がかなえることが祈りだと思っています。私は信仰を持つ前、祈るということはほとんどしませんでした。てるてる坊主にお天気になるように祈ったことがあるのをはつきり覚えています。雨になりました、「これじゃ、祈る意味がないな。」と思ったものです。このような態度であれば、心はどんどん頑なになるでしょう。

けれども、祈りは私たちの願いが叶えられるのではなく、むしろイエス様が、「父よ、あなたの御心のとおりになりますように」と言われたように、神の願われていることを叶えられるように求める行為です。自分自身が神の御心と願いの中に留まることを自分の最も大きな願いとしているかどうか、であります。神を自分の願っているように変えるのではなく、反対に、自分が神の願われているように変わっていくことです。

そうしているうちに、祈りと願いは、主の御心にかなったものであります。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえ

られたと知るので。(1ヨハネ 5:14-15)自分が願っていることが、主に気に入られるかどうかを探りながら私たちは祈るものではありません。私自身、この体が、主に受け入れられ、喜ばれるものとなっているかどうか、気をつけるのです。その中で祈っている祈りは、自ずと主の御心と願いが自分に与えられ、それで神の御心が自分を通して成っていくのです。

2B 辛い出来事がある時

そして、心を頑なにしてしまう原因となるのは、何よりも辛い出来事が起こることです。困難や試練、辛苦を味わうと、それまでへりくだって神の前に出ていた心が折れて、もう神に祈りたくないと言って、あきらめるのです。私が思い出す話は、宣教師夫婦が未開の地に行った時です。ある村で宣教師夫婦が長い期間かけて伝道しました。けれども、村の中に入れてもらえず、接触は唯一、物売りの少年だけでした。この子に福音を伝える機会しかありませんでした。そして、娘が生まれたのですが、妻がマラリヤで死んでしまったのです。その娘をもう一組の宣教師夫婦に託して、その宣教師は「こんなことをする神は、信じるに値しない」として、神を呪って帰国したのです。

しかし、その人は神のご計画の中盤までしか見ていませんでした。私たちは辛い出来事がある時に、早まって判断する過ちを犯します。神のご計画は、将来と希望を与えるものであることがエレミヤ書にあります。終わりにどうなるのかまだ見ていない時点で全てを見たかのように判断するのは、その男の場合、本当に途中までしか見ずに、神に苦みを抱きました。

その物売りの少年は、イエス様を自分自身だけが信じただけでなく、村全体に伝道したのです。そして、立派な学校が立てられ、その600名はクリスチャン、村長もクリスチャンになり、自分の教団を作り、十万人の信者がいるようになっていたのです。その娘さんは、アメリカ人の夫婦の養子となっていました。彼女はこのことを伝えるため、生みの父親を探しました。そしてその家を訪ねると、彼はもう病を患っていました。そこでは、なんと家の中で神の名を出してはならないという掟があったそうです。娘さんに会うと、彼は本当に申し訳なかったと謝りました。けれども、神の名を娘が口にすると、体を硬直させたそうです。けれども、その村で起こった神の働きを伝えました。するとみるみる体がほぐれてきて、そこで悔い改めの祈りを捧げたのです。神はこれだけ良いことをしてくださったのに、彼は自分の心を頑なに、途中であきらめてしまっていたのです。しかし神は彼を憐れみ、その数週間後に神に召されたとのことでした。

3A 神の良い御心 9-11

1B 聖めのため

主が私たちに与える、試みになるような出来事や物事は、それを機会としてもっと私たちが聖められ、キリストに似た者とされ、成熟した者となるためです。「霊の父は、私たちの益のために、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。(ヘブル 12:10)」主の中にあって忍耐していると、その忍耐が自分の内で品性となり、練られていきます。「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られ

た品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(ローマ 5:3-5)」

イエス様は、「義のために迫害される者は幸いです。」と言われました。迫害されても、なおのことキリストの愛を伝える中に、キリストの似姿がその人たちの内に培われます。この前の、フランスの風刺画誌をムスリムが襲撃した事件があり、その怒りは他の地域にも拡がりましたが、なんとアフリカのニジェールでは、何の関係もないはずのキリスト教会をムスリムの群衆が襲撃、教会とクリスチャンの家庭が 72 軒、焼き打ちに遭いました。しかし、クリスチャンたちは同胞の民に以前にもまして、キリストの愛を伝えることを決意しているとのこと。聖霊の力と愛を受ければ、憎まれた所で、なおのこと愛に満たされることができます。

2B 不平を鳴らす罪

本文 9 節に、「わたしを試み、わたしをためした」とあります。どうやったら、主を試すことになるのでしょうか？ 激しい不満がありますね。イスラエルの民が、水がなくてそれで、ここに主がおられるのか？ と激しい怒りと不満を述べました。カデシュ・バルネアにおいても、十人が悪い噂を話したので、「私たちは、この荒野で死んでしまう。もう別の頭を立てて、エジプトに戻ろう。」と言いました。彼らは、エジプトにいた時は良かったのですが、エジプトにいた時に自分たちの赤ん坊は殺され、激しい労役に付き、そうした苛酷だったことは忘れて、今の状況だけを見て不満を抱いたのです。

そして、こうした不信の心がしばしば、他の罪へと誘導します。彼らはモーセが山から下りてこないと言って、金の子牛を造り、偶像崇拜を行ない、不品行を行ないました。また、荒野の旅でさまよっている時に、コラたちがアロンとモーセに反乱を起こしました。状況の中で深い失望に置かれ、神さえも試すのであれば、その時にこうした様々な罪に陥ってしまうのです。

しかし、すべてにおいて神は、そこから何かをまた生み出そうとされて、良いものを用意されました。私たちが自分の目の前に立ちほだかる壁を見て、それで「もうだめだ」とあきらめてしまいそうになる時に、実はもうその時にすでに、主がご自分の働きを始めておられるということが多々、あります。ただ、自分がまだその実が結ばれていることに気づいていなかったということが多いのです。

3B 心の迷い

私たちはなぜして、途中であきらめてしまうのでしょうか？ 主から聞くことが、心の中に入っていないからです。10 節をご覧ください、「わたしは四十年の間、その世代の者たちを忌みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない。」と。」心が迷っているとあります。これは、心の中で決めていない、自分の思っている中だけで神の御言葉を聞いて

ている時に起こってくることです。イスラエルの民は、「主が言われることには、聞き従います」と言いました。それは、頭のおいてはその通りでした。思いの中ではそうだと強く思っていました。けれども、いざ自分のたちの思い通りのことが起こらないと、迷いが起きてしまうのです。

けれども、思いというのは試練に遭った時に、弱いものです。思いで計れば不条理なこと、理解できないことが起こるからです。しかし、思いではなく心の中で受け入れていくものは、思いで理解できなくても、それでも私は主に従いますと安定するのです。四つの種類の土のたとえを思い出してください。思いの中だけで受け入れれば、岩地であったりします。その時は喜んで聞いているけれども、試練があるとつまづきます。ですから、神の御言葉は思いで聞くのではなく、心で聞くものです。それを心に抱きしめて、主に献身するのです。

思いで御言葉を受け入れているのか、それとも心で受け入れたのかは、その人がどれだけ正しい反応をしているかで自ずと分かります。思いで受け入れている時は、その場は受け入れたように振る舞うことはできますが、何か予期せぬことが起こった時に自分の反応がまるで、受け入れたとは思えないようなものであったりするのです。しかし、心で受け入れていれば、たとえ今まで直面した状況ではなく、新しい状況の中にあっても、確かに御心にかなった動きをしている、と認めることのできるような反応をします。その人に迷いや、ブレがないのです。

そして、「わたしの道は知らない」とあります。主の下さる約束の地への道を知っていない、と言われていました。神の祝福の約束を得るための道は、聖められる、その道であります。「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。(ローマ 6:22)」聖潔に至る道です、したがって自分の内に変化を求めない永遠の命はありません。キリストの似姿へと変えられるその願いの中で、キリストにお会いするその日を待ち望むことができます。ですから、そういうことではなく、天国は単に切符みたいなものだと思っていれば、その人は神の道を知らないということになります。

4B 入れない安息

そして、「11 それゆえ、わたしは怒って誓った。「確かに彼らは、わたしの安息に、はいれない。」と。」とあります。イスラエルの民が、安息の地に入れませんでした。心をかなくなってしまったので、彼らは落ち着くところがなくなり、荒野でさまよっていました。そうです、主に自分をすべて明け渡すからこそ、その全き心を神は平安で守ってくださいます。主にゆだねるその心には、安息と、キリストにある勝利が与えられます。けれども、いつまでも心を明け渡していないと、安息にいつまでも入れないのです。

ですから、私たちは、信仰の歩みの中には、いろいろな試練があることを知ってください。心が動揺するようなことが起こるものなのだ、と心を定めている人は、動揺するようなことが起こっても心は動じません。けれども、動揺するようなことは起こらないでしゅう、クリスチャンであればすべて

がうまく行くのだからと思っている人は、かえって試練が来ると動揺するのです。信仰というのは、理解を超えているから信じます。理解してから信じるのであれば、信じるという言葉を使う意味がなくなってしまいます。今、置かれている状況が分からなくても、それでも主が語られているのだから、ということだけで信じて、そこに留まるのです。